

Geologist's an earth scientist with hammer

TuZino, Taqumi

This document is inspired from the foreword by Kawai, S
in 'Binary Hacks' by Takabayashi, S

ハンマーは伝統的に地質学者の最も重要な武器の一つであった。地質学者とは

Geologist is an earth scientist with hammer.

なのである。しかし、最近、earth scientists without hammer がカッコいいとふ考へ方がある。私はこの考へに異を唱へたい。ハンマーを持たない地質学者¹は地質学者とは云へない。

技術の進歩と共に、地質学を取りまく環境も大きく変化した。未踏査域の地質図を書くためにまづハンマー片手に歩測しながらルートマップを作ったとふのも昔語りとして聞き流されがちだ。現代の地質学者および地質学の大学院生は最初から強力な情報とツールをふんだんに使へる。(えっ、使へないって？それは、おたくのボスが予算集めのやる気がないか、能力がないかです)。

そんな環境ではアイデアさへあれば、ほいほいデータを集めてきて出来合いのコンセプトで流行に乗った timely な論文を素早く publish することができる。彼等にはいせると「今時、ハンマーなんて使う時代ではない」。

最先端の道具を使ひこなしで優れたアイデアを素早く公表してゆくのは如何にもスマートだ。一方で、この時代に露頭を求めて山奥に分け入ったり(しばしば藪漕ぎばかりで何もみつからない)、露頭でハンマーをふるって岩相をつぶさに観察したり(その間に蚊に刺される)なんて、まさしく泥くさい。クリコンを駆使して露頭線を追いかけたり、柱状に余すことなく岩相を記載するやうな職人芸は、「すごい」とは云はれても、実務に持ち込むことは敬遠されかねない。「そんな泥くさいことを、ながなが続けても、パツとする業績にはならないから、やめてくれ」

では、なぜ今、ハンマーなのか。

情報と技術の力とは抽象化(抜象)の力だ。泥くさい現場を特定の切り口で、simplify することで、関係のない膨大なダメデータ、ダメサンプル²を無視して、考へたい問題にのみ集中することができる。

だが、**抽象化には、それが成り立つ前提**が必ずある。鉄で試した実験を銅で試してゐるうちは(これを鉄銅実験とか鉄銅研究という)前提の存在はほとんど気にされることはない。ルーチンとは前提を一様に整形した(つमोरの)作業のことである。しかし、新しいことをやる時、ギリギリのところまで研究する時、つまり、フロンティアに立たされると抽象化の壁がほつれてくるのだ。なぜなら、**いつでも抽象化は完全ではないから**である。

抽象化されたハイレベルな世界で、いくら立派なロジックを組み立てても土台がぐらついたら、そのロジックはベシャンコだ。それを乗り切るには、少なくとも、ほつれた抽象化の壁の向こう側を知ってゐないとどうにもなれない。

ハイレベルな道具を使うだけの地質学者は、抽象化の箱庭で遊んでゐるようなものだ。その中でも論文は書けるし、偶然土台が破綻せずに³残る知見があれば学問に寄与することもできる。しかし、抽象化の壁に無自覚であるということは、自分の世界の限界に無自覚であるといふことだ。地質学のプロフェッショナルとしては致命的である。部外者の批判に耐へられないだけでなく、箱庭の作者の想定した枠組から抜け出ることができないからだ。

地質学者が自分の世界の限界を認め、壁の向こう側で踏査する時、必ず必要になる道具がハンマーである。ゆゑに、

Geologist is an earth scientist with hammer.

なのである。抽象化の壁の中のみで暮した者には壁の向こう側は恐しいところに見えるかもしれないが、なにも恐れることはない。もともと地質学は壁の向こう側から来たのであるから。もと居たところに還るだけである(TuZino Taqumi, 2006.12.26)。

¹英語では hammer はガッツの暗喩である。だから Geologist without hammer はガッツのない地質学者とふ他意がある。

²これはあくまで、その人からみた見方である。古生物学者なら「ダメな化石はない」とふ金言を記憶の方もゐるかもしれない

³抽象化の世界にのみ住んでゐるうちは、なぜこの土台が破綻したのか、なぜあの土台は破綻しないのかについてはなにも知ることはできない(停止問題)。